

現 代



町民体育大会

「はよ寝やい はよ寝やい ワンワンが来よるバイ、神崎国道ガータガタ 貫通道路ツーツラツ、
はよ寝やい 寝やいの」という子守歌までできた。昭和七年国の直轄事業となり同年西与賀―西田代間、
八年度祖元―扇町間、十一年扇町―嘉瀬町間、十二年県庁前と工事完了。当時は広過ぎるといわれた貫
通道路も、今日では交通許容量をはるかに越える混雑ぶりで、これが緩和策として南部バイパスは完成
し、ついで北部バイパスも開通している。

概 観

第二次世界大戦が終結した昭和二十年（一九四五）八月十五日から昭和四十九年 までを現代として区分した。昭和二十年八月十五日、天皇はラジオ放送によってポツダム宣言を受諾したことを国民に告げ、ここに第二次世界大戦は終結したのである。この宣言を要約すると

- 一、日本から軍国主義を撤廃すること。
- 二、日本に平和・安全・正義の新秩序が建設されるまで連合国が日本を占領すること。
- 三、日本の国土は本州、四国、九州、北海道及び周囲の島々に限ること。
- 四、戦争犯罪人を処罰し、民主主義を育てること。
- 五、再軍備を禁止すること

等であった。軍隊は一切の武装を解除し、戦争責任者は捕えられ、反対に戦時中の政治犯は釈放された。そして日本は民主主義国家として新しいスタートを切ったのである。

二十年八月三十日、連合軍最高司令官マッカーサー元師が厚木飛行場に到着し、九月二日米戦艦ミズリー号上で降服文書の調印が行われて、連合軍による日本占領が始まった。終戦当時はアメリカ軍が上陸したらひどい目に合わされるといふデマが次々と伝わって、人心の不安はその極に達した。家財道具を車に積み、飼育中の蚕を棄てたり、食料品をかくしたり、小さな子供の手を引いて暗い夜道を山村に逃げたり、右往左往の騒ぎであった。一方復員、外地内地からの引揚げによる寄り合い世帯の住宅難等

終戦当時の状態は舵を失なった漂流船のようであった。

同年十月十日、佐賀にアメリカ軍政府が設置された。翌二十一年元旦には、天皇は神ではなく人間であるという天皇の人間宣言が出された。以来天皇は各地を巡幸され、わが佐賀県にも二十四年と三十六年の二回視察されている。

一方、軍国主義者の公職追放、右翼団体の解散、極東軍事裁判、財閥の解体等次々に手が打たれていった。二十年十二月、農民開放指令により翌二十一年二月第一次農地改革、ついで同年十月第二次農地改革の政令が公布された。それによって不耕作地主の持つことのできる農地は一町歩以内に限られ、それ以上は政府が買い上げ、それを元の小作人に優先的に売り渡すことになった。農地委員会の組織にも小作者の利益を代表することができるようになり、更に小作料もすべて金納と定められた。

昭和二十一年には総選挙が行われ、主権在民、戦争放棄、人権尊重を三つの柱とする日本国憲法が国会を通過して十一月三日に公布され、翌二十二年五月三日から施行された。この新憲法は新生日本の根幹となるものであるが、特に注目すべき点は主権が国民にあることを明らかにしたこと、すべての国民に対して身分、門地、性別、信教等により差別されることがなく、平等な人権を保証したこと、日本は永久に戦争を放棄し軍備を一切廃したること、及び国会を最高機関としてその権限を著しく大にしたことなどである。

労働者に対しては労働三法（労働組合法、労働関係調整法、労働基準法）が次々に制定され、労働者

の団結権、団体交渉権、争議権が保障されたため、労働組合の組織は急激に広がっていった。

更に連合国は国民教育の徹底的な民主化を図り、国家神道の禁止、修身、日本歴史、地理教育が禁止され、その他軍国主義的内容は一切取り除かれたため、この種の書籍の焼却や墨で塗り消された教科書が間に合わせに使われたのである。昭和二十二年三月には教育基本法、学校教育法が制定され、六三三四制による新学制、男女共学が発足したのである。義務教育は従来の六か年から九か年に延長された。又教育の中央統制の弊害をなくすため各都道府県や各市町村に教育委員会が設置され、教育の公共性、中立性、地方分権制が実現したのである。

昭和二十六年（一九五二）九月、アメリカのサンフランシスコで講和条約が調印され、日本はようやく独立国としての主権を回復したのである。しかし同時に日米安全保障条約により依然として米軍が駐留することに変わりはなかった。

① 終戦当時の生活

終戦になっても日常の生活は苦しく、海外からの引揚げや復員等で県下は約三万世帯、十万人の人口増加となり、食糧難、住宅難、衣料難が続いた。戦時中同様戦後も配給制度によって食糧を得ていたが、その配給量も極めて少なかった。闇の売買によって食料だけでなく物資が流通していたのである。海水のびん詰め、手製のパン焼器、たばこ巻器、ノーパンクの自転車のタイヤも使用され、バスも木炭をたいて走っていた。電力不足でローソク送電も行われ、それはローソクよりも暗く、このような状態が二年

以上も続いた。闇は非法法であつたが合法的生活では戦後の生活を切り抜けることはできなかつたといえよう。こうした飢餓線上をさまよつた時代が数年続いた。しかし昭和二十五年ごろになると日本人の生活はかなり回復してきた。とり分け朝鮮動乱の勃発による特需景気で日本の経済は立ち直つてきた。衣食はまだ満足とはいえないが少なくとも窮乏状態は終つたようである。

② 電化ブームと技術革新等

朝鮮動乱後漸次戦後の新時代すなわち技術革新時代が到来し、一方又消費時代が始まつた。

技術革新時代の第一の花形はナイロン、テトロン、ビニロン等の合成繊維がトップをきり「戦後強くなつたのは女性と靴下」とうたわれ、合成繊維の登場で人々の衣料事情は一変した。

第二の花形は電化ブームでテレビ、洗濯機、冷蔵庫が三種の神器と呼ばれ、またたく間に都市から農村へと伸びていった。

衣類では手のかからぬ既成服、食料ではインスタント食品とこうした消費生活の変化や、人間が数年がかりでやつとできるような計算を数分間で解いてくれるコンピュータの出現、農村ではトラクター運搬器、耕耘機、田植機の登場などその変化はすさまじい勢いで伸びていった。

ラジオは日本放送協会（NHK）の外に民間放送が続々と名乗りを上げ、特に目覚ましかつたのはテレビで、昭和二十八年から放送が始まり、佐賀では昭和三十一年四月一日から受像できるようになった。そして今や大型化したうえカラーテレビが普及して、衛星中継による外国からの放送も受像できるよう

になった。昭和四十八年七月現在NHK調査によれば大和町内における白黒テレビ千五百十五台、カラーテレビ千七百九十五台、合計三千三百十台で世帯数三千六百五十二に対して約九十パーセントの普及率になっている。

昭和三十九年（一九六四）十月十日から始まつた第十八回東京オリンピック大会は新日本の名を全世界にとどろかし、更に昭和四十五年（一九七〇）大阪で開かれた「進歩と調和」をテーマとした万国博覧会は、戦後日本の復興の目覚ましき、経済成長のすばらしさを全世界に示し、平和日本を紹介する機会として大きな役割を果たしたといつてよい。

③ 天皇陛下大和町御通過

戦後の混乱から立ち直ろうと、県民が懸命の努力を続けていた昭和二十四年（一九四九）、天皇陛下が二泊三日の日程で佐賀県を御旅行になつた。五月二十二日は福岡県から基山町の洗心寮へ、ついで日清製粉鳥栖工場、このあと佐賀高校（現佐賀西高）へ来られた。校庭の市民歓迎場には約一万の市民が熱狂的な奉迎風景をくりひろげ、戦後四年、しばらく忘れられていた「君が代」の大合唱が湧き起こつた……と当時の新聞は報道している。金立町聖華園に来られたとき、大和町では沿道に園児を始め小中学生、全町民がこぞって日の丸の小旗を打ち振り、感激的な歓迎風景を展開し、終戦まで現つ神として国民とは全くかけ離れた雲上の人としての存在であつた天皇陛下を国民の象徴、人間天皇としてお迎えしたのである。更に二回目は天皇皇后おそろいで昭和三十六年（一九六一）四月十九日から三泊四日の

日程で県内を御視察になった。基山町の寿楽園を振り出しに整肢学園、戸上電機、県庁、鏡山、唐津鉄工所、有明干拓、深川製磁と香蘭社、伊万里市大坪小学校等十か所を御視察された。県民は十二年ぶりのお迎えだが、両陛下おそろいの御来県は初めてだけに全県を日の丸一色に塗りつぶした。

④ 経済成長とそのひずみ

戦後の技術革新や設備投資等により、日本経済の生産力は飛躍的に高まり一方国際競争力を増大させた。昭和三十八年には工業生産が戦前の五倍にも達し、二十五年から三十四年までの輸出貿易の発展は年率一四・四パーセントという世界輸出の三倍の速度であった。三十年は史上最高の大豊作となり経済成長と協和して「神武景気」と呼ばれ、続いて三十四年には「岩戸景気」が訪ずれ、「昭和元祿」といわれるように好景気が続き、諸種の賃銀は上がり、人々は次第にレジャーやレクリエーションの中に一服の幸福を求めるようになった。「消費者は王様」というアメリカ製のキャッチフレーズと共にインスタント製品が出回り、いわゆる「使い捨て時代」となり生活は派手になる一方であった。

池田内閣時代の所得倍増の掛け声によりこうしたレジャーブームとなった反面、交通事故や山の遭難事故まで急増した。天下太平ムードの中に佐藤内閣となったが、経済成長が伸展する反面四十年ごろには大企業や下請けの倒産が相次ぎ、片や安保騒動、大学紛争等三十年代は目まぐるしい時代であった。

四十年代になっても好景気は続き、オリンピックを契機に東海道新幹線、名神高速道路の開通と世は高速時代となってきた。わが佐賀県では四十年、四十一年と米作り日本一となった。しかし食生活の変

化等により米が余るようになったので減反政策がとられ、昭和四十五年から「休耕田」ができた。一方柑橘類の栽培が奨励されたので、当町でも田地を密柑園に切り換えた。ところが昭和四十九年になると全国的な密柑の豊作によりやや過剰となってきた。

核家族の増加により人口は余りふえないが世帯数はふえ、当町でも住宅は不足するばかりである。

一方経済成長の陰には企業の悪液の垂れ流し、車による騒音と排気ガス、農薬撒布による毒物等全国的な公害が発生し、河川や海、空気は汚染されるばかりで、ついに有明海の漁業も一時ストップし人々は公害に恐れた。

インフレは進行する一方であり物価は上がる一方である。四十八年十月突如物資不足の声が全国に広がりが買いたさり騒動が起きた。チリ紙、洗剤等あらゆる日用品が店頭から姿を消し、一時国民は茫然となった。中東の石油産出国の石油輸出の制限や値上げ等に乗じた一部企業や商社等の作戦によるといわれているがその真偽は判明しない。この騒動も四十九年になってやや落ち着き物品は出たが価格は上がったままで国民の生活はますます苦しくなるばかりである。こうしたことも長い歴史から見れば一つの小さなうねりかも知れない。